

# 2012年の優勝は単騎で戦った佐藤友和 教えてくれたのはひとりで戦うときの心構え



7月16日の決勝は、川村晃司・稲垣裕之・村上博幸が逃げて、脇本雄太・市田佳寿浩が別線で、まくりの展開。単騎の佐藤は京都トリオにつけて、番手まくりを打った稲垣の3番手から外を追い込んで、京都勢から優勝をかつさっていた。ちなみに直前の小松島記念も単騎戦で優勝している。

佐藤は単騎のとき、最後方について、最後に動いたラインに乗って、外を踏んでいくレースも見せる。まるでミスターシービー・吉永正人のように↓古すぎるかな、ついてきてもらえるかな。

その後、単騎の競走について聞いたことがある。切り替えたり、あれこれしないんですか？

「もう、そこにコマを置いたんですから」

間髪いれず、スパッと答えてくれた。戦い方を決めたら、実行あるのみ。そうなれば勝てるという

自信の元、あとは自分が伸びるか伸びないか。競輪の神様が自分に微笑んでくれるか、くれないかに賭ける。そう僕は解釈しているんですけど…。

「弥彦の直線はひと踏み長い」。

2013年に優勝した金子貴志がこのバンクをこう表現していたのを思い出した。1周400mで、4コーナーからゴールまでが63・1mと長い。イエローラインのあたりから外、それに中を割ったときも伸びる。内は距離的には有利だけど、2センターあたりから踏み続けられる流れだと、最後の10mでぐいぐい加速していく。単騎の選手でも狙えるバンク。もちろん前の自力選手が垂れるかどうかなんですけど…。今の競輪はスピードが落ちないからなあ。

▽弥彦競輪 寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント  
思いつくまま回顧録 第6話

【新潟スポーツ 信氏 忠】

